

畑中 とほる（はたなか・とおる）

1、プロフィール

本名・徹。俳人である父・畑中秋穂の影響を強く受け、作句活動始める。俳誌「あしかげ」の主宰を務めた。県俳句大会、北奥羽俳句大会の選者を務めた。2000（平成 12）年、句集『下北半島』を出版。

<生没>

1939（昭和 14）年 12 月 5 日 ～ 2025（令和 7）年 6 月 9 日

<代表作>

句集『下北半島』

歌集『郁子抄』

随筆『恐山の石仏』

<青森との関わり>

父の赴任地、樺太で生まれるが、1972（昭和 17）年、母の郷里である田名部町に一家で転居した。

2、作家解説

1939（昭和 14）年、教師である畑中秋穂の四男として樺太に生まれ、父の転勤により、母の郷里である田名部町に転居する。父・畑中秋穂は下北の俳句結社の草分「あしかげ」創設者の一人で、増田手古奈、高松玉麗らと県俳句大会の選者を務めるなど、「下北の雄」として活躍した。兄弟の中で、俳句に関して父の影響を一番強く受け、中学2年から俳句を始める。昭和 30 年代に俳誌「あしかげ」、「寂光」の同人となり、1966（昭和 41）年に歌集『郁子抄』を出版する。また、1976（昭和 51）年には一番札所の常楽寺から恐山に続く石仏（観世音菩薩）とその周辺を紹介した『恐山の石仏』を出版する。

昭和 50 年代後半になると、文芸結社「下北文化社」、俳誌「薫風」の同人となり、創作活動に一層情熱を傾け、1982（昭和 57）年の角川俳句賞通過を皮切りに、

1992(平成4)年までに同賞の候補3回、通過2回という実績を残している。また、1997(平成9)年には俳句研究賞候補となるなど、常に全国レベルの俳句に挑戦すべく作句活動続けた。

自らは、「父秋穂を目標としながら別な句の世界を探し、いつか超えることができれば」と語り、「情を殺して情を詠む」を創作の信条としている。1994(平成6)年に俳誌「春耕」同人となり、翌年にはむつ市文化奨励賞を受賞している。その間、東奥俳壇選者、北奥羽俳句大会選者、青森県俳句大会選者等を務め、下北の俳壇の指導者として活躍した。また、小学校校長の在職中は、作句活動を通して「自然を見るに、愛情を持って見る」を子どもたちに教え、あるがままに物を見る目が育てば生活指導にもつながると、後輩教員へのエールも送っている。2000(平成12)年3月、40年の教員生活を終えるのを機に「あしかげ」の主宰となり、後進の指導に力を注いだ。

3、資料紹介

○『句集 下北半島』

図書

2000(平成12)年5月

139mm×202mm

昭和50年から平成11年初期までの下北の風土を詠み上げた350句を収録。本書の序に皆川盤水氏の評、「名実ともに下北を代表する作家として断言してよかろう」とある。